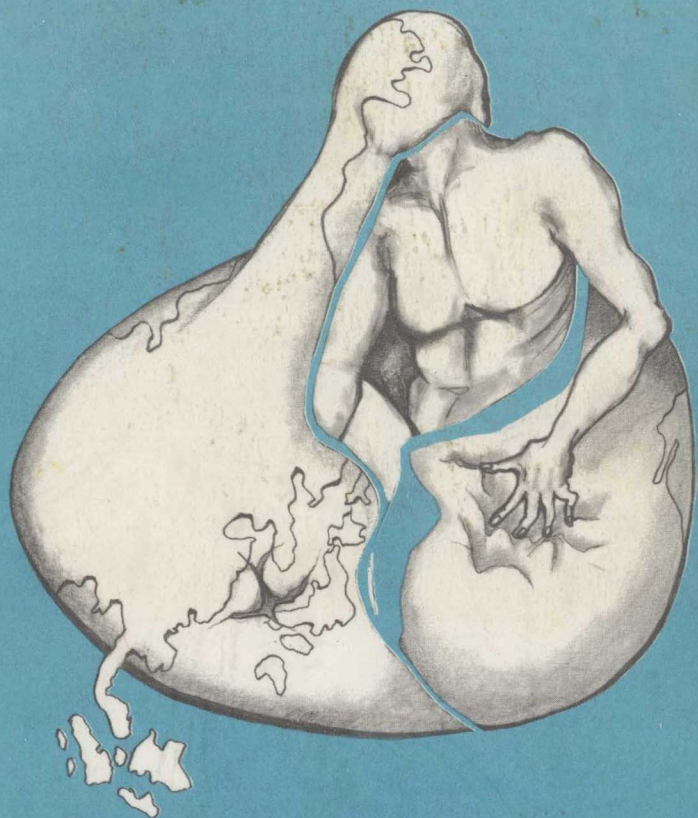


田村正敏

蜂起と夢と伝説



海燕書房

蜂起と夢と伝説

一九七五年六月一五日第一刷

定価—— 一一〇〇円 ©1975

著者—— 田村正敏

発行者—— 相沢尚夫

発行所—— 株式会社海燕書房

東京都千代田区内神田一—四—六 三洋ビル

電話(〇三)二九三—九九三一 振替東京一—八二二九

印刷所—— 株式会社誠進社 製本所—— 松栄堂製本所

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。

田村正敏

蜂起と夢と伝説

蜂起と夢と伝説
目次

I

夢の蜂起——9

わがイソップ考——15

II

〈私〉教育について——63

神はいるかな——87

III

旅の中の志——93

——私にとっての『世に棲む日々』

青年西郷の旅——107

IV

地域における関係の意味——125

新しい船に乗ることとは何か——141

出発することの意味——185

あとがき——227

初出一覧——230

I

夢の蜂起

エレベーターってやつは、どうも苦手だ。だから、いつもならほとんど階段を歩いて昇り降りする。しかし、今日はそうもいってられない。なにしろテキは二十四階に住んでいるのだ。それに約束の時間にも遅れている。

ブザーが鳴った。ドアがゆっくりと閉まる。僕は、あわてて「24」のボタンを押した。中に入ってみると、ずいぶん狭いエレベーターだ。畳二枚はなさそう。乗っているのが僕一人だからいいようなものの、これで「七人乗り」なのか。それに、何だかやけに遅い。まだ三階と四階の間あたりだ。シュルシュルと妙な音までしやがる。

僕は眼をつぶった。どうせ、一番上まで行くのだから。

そう思ったとたん、軽いショックを感じた。上昇している感じがなくなり、地震の時のような横揺れに二、三度襲われた。最近のエレベーターは地震の時は自動的に止まるのかもしれない。

次の瞬間、エレベーターがスーッと横の方へ動き出したような気がした。気がした、というのは、もうそれ以上確かめようがなかったのである。エレベーターってやつは、一度一定の速度になつてしまうと、ちょっと理屈っぽく言えば、加速度が一定になると、じつは、本当はどっちの方向へ進んでいるかわかりやしない代物なのだ。ただ、僕らはエレベーターは上か下へしか行かないと思ひこんで安心しているだけなのである。

その時、僕は、横に滑るように進むエレベーターで行くところまで行つてみよう、という決意を一瞬のうちに固めていた。というのも、エレベーターが横に滑り出したのは、僕にとって初めてのことでなかったからだろう。そんな夢を、僕は何度か見ていたのである。ただ、いいようもない恐怖に襲われて、エレベーターがどこかに着く前に、いつも目覚めるのだった。刑務所にいた頃のことだ。

刑務所といつても、未決だった。たまたま（？）東京拘置所がいっぱいだから、と説明された。場所は府中。

それが、入つてすぐに驚いた。なぜか以前に一度来たような気がした。いや、気がしたというより、はっきりその記憶が甦つたのである。門入つて、最初に引き継いだ看守の言葉から何からそっくり同じなのだ。

夢だ、と思った。

出て来てから、心理学科の友人に聞いてみると、初めての光景を目にして、かつて見たことがある、と思うのは、それほど異常な体験ではないらしい。彼らば、この現象を「デジャ・ヴュ」とと気取ってフランス語で呼んでいた。

僕の場合は、まさに「デジャ・ヴュ」(既に見たもの)で、日大闘争が始まった頃に、府中の光景とまったく同じ夢を見ていたのだった。雀の鳴いているのまで同じだった。鍵のかかった扉をいくつもいくつものくぐり、ちょうど十文字に交差する建物が見えた時、僕はたぶんかなり青い顔をしていたと思う。僕は、その建物がどんな形をしているか知っていたのだ。それから、僕は左へ曲がり、ラセン形の階段を上がり、鍵のかかった廊下の扉を開けると、ガラスの天窓のある船倉のような房(ボウ——「独房」などの房だ)が並んでいた。あの時も、船に似ていると思った。僕は、その頃になってようやく、眼の前の光景が夢ではなく、記憶の方が夢であったことを思い出しかけていた。

あの時は、真中から二つ目か三つ目が僕の場所だったなと思い出しながら見ていると、はたして僕に与えられた場所はまさにそのとおりだった。

もっとも僕がそこで過ごしたのは、わずか十カ月のションベンだった。

繰り返し見る夢がある。

目の前に土手が大きいのかかり、はじめの方に水門があった。水門の辺りの流れは速い。どろどろして黒く濁っているわりに速い流れだ。水門の向こうには大きなトンネルが続いている。水はトンネルの中に流れこみ、決してあふれたりしないのだが、僕たち（夢の中では、僕たちはまだ本当の子どもである）には通り抜けられない。何人もの仲間が一緒に入ったはずなのに、やがて気がついてみると、いつも一人なのだ。

これは、どうやら体がやや疲れている時に見る夢のようだ。心身ともに疲れ切っている時は、さらにこの水面に死体が浮かんでいる。夢の中の少年である僕は、その死体が気味悪くてしかたがないのに、さわっていたりする。そして、その死体の顔が現在の僕であったりする。そんな時、空はほとんど赤い。ほとんどというのは、何通りかの黄色い線がいつも入っているからである。

その空の赤さに気づいた時、僕はトンネルに切り裂かれるような気がして動けなくなる。トンネルからどうしても抜け出せないのだ。

これは、僕の少年期の記憶——朝鮮戦争の頃の川口の町、その町はずれの川で死体を見たことがある——と関係があるのかもしれない。過去との闘いのような気のする夢である。

考えてみると、僕は夢をよく見る。必ず見る、といった方がよいくらいだ。それも、しばしば荒

唐無稽なやつを見る。先日こんな夢を見た。

朝起きて、新聞を手にとると、奇妙な広告が目に入った。薬師如来が僕に会いたがっているから、すぐ連絡しろ、というのである。連絡といわれてもちょっと途方に暮れそうなものだが、僕はためらわずに家を出た。

家を出ると、すぐにとてつもなく大きな湖のような所に出てしまった。その静かな湖面には鮮やかな緑色の葉をつけたつたが、一直線に走り、その向こうに建物が浮かんでいるのが見えた。まだ夜が明けきっていないのか、灯明のようなものがぼんやりと見える。僕は、そこに薬師如来がいると直観的に信じた。

御簾みすの向こうは赤く輝いていた。横の人が、小声だが威圧的な調子で、決して顔を上げてはいけません、と言うと、僕はなぜか猛然と御簾に向かって進んでいった。何か声を出したかもしれない。御簾の向こうの薬師如来の顔がちらと見えた。三角形の異様な顔だった。僕は、片眼だなと感じた。その時、僕は横の人物に物凄いい力で押えつけられてしまった（その男は、どこかで見たような顔だったが、どうも思い出せない）。

僕は目をさました。

こんな夢にどんな意味があるのか、僕は知らない。しかし、僕たちの闘争にそんな夢が深くかわっていたことは事実である。

僕は、闘争を始める前日（まさしく日大の蜂起の前日だ）、何としても明日やる、と強硬に夢中になって主張した。明日、という根拠が特にあったわけではない。ただ、僕はその前夜、夢を見ていた。日大のコンクリートの建物の上に赤と黒の旗がそれぞれ一本ひるがえっていた。そして、妙に静まり返ったキャンパスに無数のビラが舞っていた。夜のようにだった。そんな夢を見ていた僕は、できる、できるはずだ、と主張した。ずいぶん乱暴な話である。

そんな乱暴な話がほかにもある。秋田明大の話だ。彼はあまり自分のことを語らない男だが、闘争から数年を経て後、二人でしたたか飲んだ夜に、阿彌陀様の夢の話をしてくれた。闘争の前に、夢に阿彌陀様が出て来て、ただ一言「やれ」といったというのである（因縁話めくが、僕たちが打倒しようとした古田は、かなり熱心な観音信仰の持ち主であったことを、後に知った）。

秋田たちと僕たちは、それぞれ別個に突然立ち上がった。それも、そのはずである。他人には決して見ることできぬ「夢」がその重要な契機だったのだから。

エレベーターが止まった。扉が開くと、「24」という数字が目に入る。何のことはない。向こうから子どもの手を引いた若い母親が歩いてくる。おそらく僕と同じくらいの年齢の、美しい女だった。ありふれたけだるい午後だ。

僕は、ゆっくりとすれ違いながら、ぼんやり考えていた。僕たちが明日見る夢は何か、と。

わがイソップ考

陣

——何か大事なことを、どこかに忘れてきたような気がしていた。それが、いつ、どこからなのかは覚えていない。

——定着している。

——難しい。何が大切な問題なのかがはっきりしない。

その年の春はおそかった。

何度目かの強い風が吹いて、私たちは、朝を待っていた。なんとなく、素直に下宿へ帰るのは、敗北、人生そのものの敗北のような、やり切れなさ、私たちを暗い町なかにとどめさ